埼玉学園大学・川口短期大学　機関リポジトリ

Men and Women Who Were Seen through Cross-Dressing (5) Cross-Dressing in Modern Times

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2017-07-28
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 赤阪, 俊一
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/878

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

異性装から見た男と女(5)―― 近代における男装者たち

Men and Women Who Were Seen through Cross-Dressing(5):

Cross-Dressing in Modern Times

赤　阪　俊　一

AKASAKA, Shunichi

はじめに

前稿までは中世における異性装を扱ってきた。中世という時代の制約、つまり史料残存のありようが極めて悪いという状況のため、実際の異性装というよりも、物語化された異性装の分析を中心にせざるを得なかった。本稿では、実際の男装のゆえに社会に大きな波紋を投げかけた女性たちを扱う。男と女がおかれた状況が大きく変化したにもかかわらず、近代においても異性装はいまだに逸脱とみなされていた。しかし異性装に対する人々の目は確実にそれ以前の時代とは異なっている。

1　アメリカ独立革命時の男装者――デボラ・サムソン

18世紀になると、異性装者でも状況しだいでは生存中に賞賛を勝ち得ることが可能となる。デボラ・サムソンの場合がそうであった。彼女については、まだ存命中の1797年にハーマン・マンによって伝記が書かれた。マンは彼女自身から聞いたことに基づいて書いたというが、後に『仮装者』[1] を著したヤングによれば、マンの著作は回想録であり、フィクションであり、事実の寄せ集めであり、かなりの部分がファンタジーだという代物であった。逆に言えば、18世紀には異性装者でもファンタジーの主人公になり得たのだ。子供用の伝記もアン・マクガヴァンによって書かれている。[2] デボラは一種のアメリカン・ヒーローなのだ。ヒロインが常に受身的であったとすれば、ヒーローたるデボラはアメリカ革命への献身的な参与という形で積極的に時代にかかわったとされる。除隊後、デボラは退役兵士のための年金を得るべく政府に働きかけ、1805年から年金を受領することができるようになった。[3] また自らの体験を語ることによって、アメリカ最初の女性巡回講演者となったデボラはまさにアメリカン・ヒーローにふさわしい。デボラの男装は、彼女にとっては男として生きることを意味していた。その意味ではデボラは古代末期の男装聖女と基本的に変わりはない。しかし、その結果は古代とはまったく異なるものであった。

1784年１月10日付のニューヨーク・ガゼット紙に次のような記事が載せられた。[4] この記事には署名がなく、誰が書いたのか明らかではないが、ヤングは、ジョン・パターソン将軍が書いた可能性が高いと推測している。[5] パターソン将軍とは何者かについては後に譲

キーワード：ジェンダー、異性装、歴史
Key words ：gender, cross-dressing, history

るとして、まずこの新聞記事を読んでいただきたい。

女性兵士における美徳のとても珍しい例が最近アメリカ陸軍のマサチューセッツ連隊で見られた。はつらつとして美しく若き19歳の妖精が男の装いをして発見されたのだ。これは彼女の名誉を高めることになるのだが、彼女はほぼ３年もの間、誰にも知られずに一兵士として勤務してきた。その間、彼女は活力、油断なさ、上品さ、武勇を備えていることを示し、何度も敵と戦闘を行い、二ヵ所の傷を負った。今も彼女の体の中には弾の破片が残っている。彼女は歩哨の際きわめて慎重であり、常に彼女の上官たちの賞賛を得ていた。彼女が付き合っていたのは、酒を飲んでいるのを見られたことがなく、常にもっとも廉直で控えめな兵士たちであった。

数ヵ月の間、この女性勇者はある将軍の家庭において当番兵として勤務し、信用を得ていた。（部隊がフィラデルフィアにいたときに）ひどい病気のために、彼女が女であることが発見された。それゆえ彼女は報償を得て、陸軍からの名誉除隊となり、ボストンの東方、マンダンクックと呼ばれるところに住んでいると思われる親戚のもとへと送り届けられた。

男のなりをした理由は、彼女が強い反感を持っていた青年との結婚を彼女の厳格な両親が親としての特権を振りかざして強制しようとしたためであり、また彼女が祖国に強い愛着を持っていたためであるといわれている。そしてその祖国への奉仕において彼女は名誉を得たことを認めねばなるまい。彼女は明らかにわれらの偉大なる革命の歴史の編纂者たちによって注目を浴びることになるだろう。彼女は、陸軍にいる間は、ロバート・シャートリーフなる名前で通っていた。そしてその名で連隊の登録簿に登録された。特別な理由があって、彼女の実名は明かにするわけにはいかないが、上で述べた事実には疑問の余地なく、またなんら潤色などは行われていない。

ここに登場するデボラは、美しく若き女性であったと民衆層によって想像されているジャンヌ・ダルクを思い起こさせる。ジャンヌの実像はあの詳しい裁判記録を読んでも、あまり明確ではないが、デボラについては、つい200年ほど前のことであり、ある程度のことが判明している。

この記事は比較的正確ではあるが、ところどころに思い込みからくる独断が混じる。たとえば19歳の妖精云々は、おそらくそう見えたということであり、実際は、デボラは1760年（あるいは1759年）生まれなので、当時は23歳あるいは24歳であり、もしかしたら25歳であったかもしれない。３年間の兵役を終えたと書かれているが、デボラが兵役に就いたのは、1782年５月20日であり、退役したのが、1783年10月25日であるから、実際は17ヵ月間兵役に就いていただけである。[6] また彼女が男装をしたのは、親が決めた結婚から逃れるためであったのではない。デボラは、５歳のときに家を出、それ以来、親との関係は疎遠であった。彼女が男装したのは、もっと実利的な理由であった。当時教員として働いていたミドルバラを出て、一人で旅をしなければならなかったからである。ミドルバラを離れなければならなかったのは、彼女が男装して兵士の登録をし、奨励金を得たことがばれた

ためであった。この一度目の男装の理由はわからない。何らかの実験か、金を得ることか、あるいは単なるいたずらか。とにかく町にはいられなくなったのだ。[7] 彼女はもちろんこの事実を隠し続けていた。こうした状況を考慮に入れると、彼女が男装して軍に入ったのは、奨励金を得ることだったと推測することも見当ちがいとはいえないだろう。３年間の軍務を前提に彼女に渡された奨励金は60ポンドであった。[8] 職を捨てた彼女にはそれが必要であったはずなのだ。

デボラが賞賛されたのは、18世紀という時代性のゆえであり、これ以後、異性装は逸脱とは見られなくなったのだと考えるのは早計である。なによりデボラの最初の異性装の結果がそれを証明している。さらにデボラが兵役に就いた年より５年前の1777年２月、ボストンのアン（もしくはナンシー）･ベイリなる人物が、サム・ゲイなる名前で兵役に登録し、15ポンド10シリングの奨励金を受け取ったが、３週間後に男装女性であることが知れ、除隊させられている。彼女は逃亡したが、逮捕され、「若き男性であると偽る」ことによって「不正にも国民を欺き害する意図をもっていた」という二重の罪で起訴された。その結果、彼女には罰金と２ヵ月の禁固刑が科された。[9]

デボラが兵役に登録した1782年の春、西マサチューセッツのスプリングフィールドにおいてサミュエル・スミスなる名前で兵役登録したアン・スミスはすぐさま女性であることを見破られ投獄された。監獄の中で、彼女は以前にも兵士となり、発見されずに３ヶ月の間兵役に従事したと主張したそうである。[10]ベイリーとスミスの収監は、18世紀の末であっても、少なくとも女の異性装に対しては、程度の差はあれ、犯罪と見られたことを示している。

男装兵士で問題となるのは、彼女たちが兵士になったということではなく、男になりすまそうとしたからである。というのは、デボラの時代、ある意味では女も兵士であらねばならないような状況が続いていたからである。たとえば第６代大統領ジョン・クインシー・アダムズの母であり、第２代大統領ジョン・アダムズの妻であったアビゲイルは、夫に次のように語ったと伝えられている。

> 我々の男たちが全員撃退され、我々が攻撃されるようなことにでもなれば、あなたはアメリカにアマゾン族を見出すことになるでしょう。[11]

また、ニューイングランドでは、フレンチ･インディアン戦争の際、女たちが男の身なりをして、「アマゾンの勇気」をもってフランス人やインディアンと戦ったという伝統が語り伝えられており、また民兵が出払っている間に危機が訪れたときには、女たちが郷土防衛民兵隊を形成するという習慣もあった。[12] 女たちが戦うことは決して例外的なことではなく、日常生活のなかに組み込まれていたのである。にもかかわらず、男装して兵士となったら処罰されるというのは、男となりすますことが男たちによって忌避されたと考えざるを得ない。フレンチ・インディアン戦争の際、女たちが男の身なりをしたのは、あくまでも動きやすさのためであり、男と見なしてもらおうとしたわけではない。しかし男装して兵役に就くことは、男となりすますことであり、それが犯罪とされたのである。

デボラはロバート・シャートリフなる名前で軍務に就くことになる。女であることがば

れないように、デボラがどのような努力をしたかを、ヤングはさまざまに想像しているが、いまはそうした細部には触れない。所詮は想像にしか過ぎないのであるから。

デボラはとにかく17ヵ月の間、なんとか兵役を勤めあげた。彼女は普通の男よりも少々背が高く、胸はほかの若い女に比べれば小さかったと言われているが、それが彼女の男装を容易にしたとヤングは想像している。[13] ヤングによれば、そもそも軍服というのは、女が男に扮するにはもってこいの衣装であったという。なぜなら軍服を着ているのが女であることなど人々の想像の枠外だからである。[14]

デボラがパターソン将軍の当番兵に任命されたことも、デボラにとって幸いであった。[15] 狭い兵舎の中で常に共同の生活を強いられる軍隊生活では、女であることを隠し通すことはかなり難しいが、パターソン将軍の家に住み込んで一室を与えられる当番兵の仕事は、デボラにはうってつけであった。彼女がどれだけの期間当番兵であったかははっきりとはしていない。マンは、１月から10月までのほぼ10ヵ月と考えるが、ヤングは、４月からほぼ６ヵ月勤めたと推測している。[16] 当番兵としての生活が４月からであれ、１月からであれ、夏の暑い時期に当番兵であったのは、デボラにとっては幸いであったはずである。夏の暑い間、兵士たちは池や川があると、裸で水浴びをしたものだし、また外見を清潔に保つように命令が出され、毎日検査があったため、[17] ずっと軍服を着たままでいることなど不可能であったからである。なお先に引用したニューヨーク・ガゼット紙の記事の著者ではないかとヤングが想像しているパターソン将軍は、デボラが当番兵として仕えたこのジョン・パターソン将軍である。それゆえ軍隊の中では、おそらくこのパターソンがデボラのことについてもっとも詳しかったはずである。

シャートリフが女であると発見されたのは病気が契機であった。天然痘のためほとんど人事不省に陥ったシャートリフを診察した医者が真相を発見したのは、この天然痘がはやった1783年の夏のことであった。この医者は、デボラにも、その他の誰にも真相をもらさなかったようである。ヤングによれば、彼女が病気になったのはおそらく６月で、回復したのは８月であった。しかし除隊は10月であり、その間２ヵ月、どのようなドラマがあったのか、ヤングはいろいろと想像している。[18] 10月に彼女が女であることがパターソンに知れたが、彼女は収監されず、将軍が彼女の人となりを保証したため、むしろ賞賛されることになった。[19] 彼女が罰せられなかった理由をヤングは二点にまとめている。[20]

① 軍事行動で彼女が有能であることを証明していた。

② 女であることが発見されたときにはすでに戦争が終わっており、国が祝賀ムードに沸いていた。

理由は複合的なものであろう。しかし時代が変わったからというのは当てはまらない。先にも述べたように、女の異性装はやはり罰せられたし、法律的にもマサチューセッツでは男装禁止がまだ効力を持っていた。[21] しかしもしかしたら新大陸であるという特殊性は考慮に入れる必要があるかもしれない。

デボラ・サムソンと対比するため、次に旧大陸における18世紀の男装女兵士を見ることにする。

2　近代オランダの男装者たち

a　マリア・ヴァン・アントウェルペン

1769年２月23日、ひとりの女にオランダはハウダ（ゴーダ）の市民裁判所が有罪の判決を下した。罪状は、「名前と性を変えることによる過大かつ法外なる欺瞞ならびに婚姻に関する聖なる法と人間の法に対する愚弄」であった。[22] この女性は名前をマリア・ヴァン・アントウェルペンという。1769年に逮捕されたときの彼女の供述調書はフォリオ43枚分もあり、[23] それを分析すると、それまでのマリアの生活と異性装のありようが浮かび上がってくる。この供述調書を分析したデッケルとヴァン・デ・ポルに従ってマリアの生活を再現してみる。

マリア・ヴァン・アントウェルペンはブレダのブランデー製造業者の娘であった。子どもが多かったので、彼女の父親は貧しくなり、ついには船渠労働者として生計を立てねばならなくなった。母親は彼女が11歳のときに、父親は12歳のときに亡くなった。彼女はおばに引き取られたが、そこで彼女は不幸であった。40年後になってもまだ苦々しく、自分がいかにおばにひどく扱われたかを語っている。彼女によると、「子どもの生活というよりも、犬の生活」[24] を強いられたというのだ。

外で働けるのが可能となるや、マリアはおばの家を出、召使として働き始めた。マリアは頻繁に主人を変えているが、それ自体は当時にあっては異常というわけではない。1746年、彼女が27歳になったとき、当時彼女が仕えていた家族とともにワヘニンヘンに赴いた。ところがそこで彼女は解雇されてしまったのだ。真冬のワヘニンヘン――オランダの東部にある田舎町であった――では、仕事などなかったし、そこに彼女は友人も親戚も持っていなかった。[25] 彼女にはいまや売春婦になるしか道がなかった。しかし彼女は売春業には手を染めたくなく、従って男になることが、純潔の処女でいるためのたったひとつの道だったのだ。[26]

処女でいるために男となるという発想は、中世初期の男装の聖女とまったく同じである。敬虔なカトリックであったマリアはこうした男装聖女の話をどこかで耳にしたことがあっただろう。またおそらく男装して軍隊に入った女たちのことも聞いたことがあっただろう。男装して軍隊に入った女たちはさして珍しい存在ではなかったに違いない。なにしろデッケルとヴァン・デ・ポルが発見した16世紀から18世紀にかけての男装者の多くが兵士となっているからである。

さて、マリアは男の衣服を着て真夜中にワヘニンヘンをたった、そして次の日、路上で陸軍の徴募員に声をかけられたのだ。翌日、パブに連れて行かれ、彼女は“ヤン･ヴァン･アント、16歳”として契約書にサインした。発見されるのではないかという恐怖が去らなかったものの、ヤン・ヴァン・アントはすぐに兵隊生活に適応した。ヤンの部隊がコエヴォルデンでキャンプしたとき、彼女はヨハンナ・クランマと出会い、1748年８月、正式に結婚した。[27]

ヨハンナは最後までヤンが女であることを知らなかったようである。ヤンが結婚したのは、おそらく兵士としての共同生活から逃れるためであっただろう。一般兵士にはプライバシーなど存在しないが、結婚した兵士は世帯を構えることができたからである。それに前産業化社会では、結婚すれば、独身でいるときよりもより大きな経済的安定性と安楽さ

が与えられたからでもある。

夫であることの役割は、昼の間は簡単であった。しかし夜になると、男の役割は難しくなる。妻に自分が女であることを気取られないようにするためにはかなりの努力が要る。ヤンは常に不機嫌で病気のふりをすることによって性的な接触をうまく避けえたようである。結局、３年間の結婚生活の間、ヨハンナはヤンが女であることを知らないままであった。[28]

1751年、ヤンの部隊がブレダに駐屯していた際、ヤンが以前に勤めていた家族によってヤンが女であることが暴露された。こうしてヤンは逮捕され、医者によって検査された。その結果、彼女は解剖学的には女性であるという結果が出された。[29]

有罪判決を受けた後、彼女はブレダには住むことができず、兄弟のひとりがいたハウダに行った。そこで彼女はヤンシェ・ヴァン・オーエイエンなる女性と知り合いになる。彼女はマリアが寝泊りしていた宿のおかみの姪であった。彼女たちは一緒にロッテルダムに行き、マリアはお針子として生活費を稼いでいた。３年半の後、マリアはヤンシェをおばのもとに返した。そのとき、彼女は、ヤンシェを養うにはあまりに仕事が少なすぎると言っている。この言い方は、マリアが夫の役割を演じていたことを示唆するとデッケルとヴァン・デ・ポルは推測している。[30] しかしその間の彼らの関係については、マリアはなにも語ってくれない。

1761年にマリアは再びハウダで暮らし始めたが、この頃、マリアはコルネリア・スワルツェンベルフという女性と出会った。当時、コルネリアは妊娠していた。コルネリアはマリアの過去を知っていたようで、マリアを説得して再び男の身なりをさせ、結婚することにした。今回、マリアはマヒール・ヴァン・ハントウェルペンという名を選んだ。[31]

1762年に彼女らはズウォッレで正式に結婚生活を始めた。そこにはマリアの兄弟が住んでいたからである。結婚の直接の原因であった子どもは死んで生まれたが、コルネリアはその後２回身ごもった。一度目は死産であったが、二度目には男の子が生まれ、洗礼名として、ウィリブロルト・ヴァン・ハントウェルペンという名が与えられた。マリアの兄弟とその妻が洗礼の際には代父代母として出席した。[32]

1764年に、マリアは再び兵士となったが、1768年末解雇された。喧嘩好きのためという理由であった。[33] 1769年にはマヒールが女であることが判明し、逮捕されて、有罪判決が下された。このとき以後、マリアに関する情報はほとんどない。わかっているのは、マリアが生まれ故郷のブレダで1781年に死去し、貧民墓地に埋葬されたということだけである。[34]

1769年に逮捕されたときにもマリアは医学的な検査を受けさせられているが、このときも解剖学的には女性という結果であった。[35] しかしながら彼女の意識からすれば、彼女は自分が女であるとはどうも思っていなかったようなのだ。女の服を着ているときでも、彼女は常に下に男物の服を着ていたと裁判の際に言明しているし、[36] 召使をしていて貯めた金でまず購入したのが銀の煙草入れであったことにも、[37] 彼女のアイデンティティが男であったことが示されている。裁判の際、「男か女か」と問われて、マリアは、「気質と性格においては男であるが、外見においては女である」[38]と答えているのを見ると、彼女は本質

的にはむしろ自分は男であると思っていたようだ。自伝の最初で、彼女は神と自然と運命が彼女の異性装を運命づけているのだと強調している。彼女は両親の７番目の息子であると期待されていたのだから、[39] 彼女にとっては、男の衣服を着るのが当たり前だというのだ。[40]

彼女は敬虔なカトリック教徒だったので、神の祝福が極めて重要であった。そのために彼女にとっては処女でなくなることは耐えがたいことであり、貧困ゆえに売春婦となることには、我慢ならなかったようだ。あるいは“男”としてのプライドがそれを許さなかったのかもしれないし、男と性的な関係を持つこと自体がいやであったのかもしれない。裁判所において、他の女性と結婚することで、聖なる法を破ることになると非難されたことに対して、彼女は、自分は花嫁を単に妹とみなしていただけなのだから、聖なる法を破ることにはならないと自己弁護した。[41] マリアが妹とみなした女性と情事にふけったかどうかを裁判所も知りたかったようであるが、マリアと件の女性との肉体関係については裁判所は証明することができなかった。[42]

マリア・ヴァン・アントウェルペンの時代、異性装は犯罪ではあったが、忌み嫌われているわけではなかった。マリアの兄弟はマリアが男装して結婚生活をしているのを認めているし、なによりマリアが男装する契機となったのは、マリアが勤めていたある家の主人が面白がって、マリアに男の召使の服装をさせたことがあったからである。別の主人も、マリアには男の服のほうがよく似合うと言ったそうである。[43] おそらくマリアに男の服を着たいという志向性があったがゆえにこのような言葉に反応したのであろう。一般の人にとっては、女が男の服を着るということにさして抵抗感がなかったということを、これらの言葉が示してくれている。

b　さまざまな男装者たち

デッケルとヴァン・デ・ポルは、17世紀と18世紀のオランダ共和国内で119例の男装者を発見した。これら男装者が発見されたのは彼女たちが多く犯罪にかかわり逮捕されたからであった。[44] それゆえ男装者の数はもっと多かったにちがいない。興味深いのは、彼女らの少なからぬ部分がオランダ共和国以外の生まれであったことである。その出生地がわかっている55名の女たちのうち、24名はオランダ共和国以外の出身であった。[45] オランダ共和国の繁栄のゆえに、他国から流入してきた人たちであったようだ。このように出生地から遠く隔たったところにいることが、男として生きることを決意することに、何ほどか影響を与えたのではないかとデッケルとヴァン・デ・ポルは推測している。[46]

男として生きようと決意したことの背景に貧困がある。マリア・ヴァン・アントウェルペンのように両親が死んでしまった女性には、この時代はとりわけつらかった。マリアより１世紀も前に生きたマルトヘン・ヤンスも幼い頃に両親をなくしている。彼女も働き場所を求めてアムステルダムに来たが、貧困のあまり、男装をして仕事を得ようとするにいたったという。[47] 両親が死去した者だけではなく、何らかの原因で親元から出奔し、帰れなくなった者たちも男装に走ることになった。

このように男装の動機の中でもっとも重要なのは貧困であった。1653年に男装のゆえに裁判にかけられたアンナ・アルデルスは、何ゆえ男装したのかと判事に問われて、手短に

「貧しかったから」と答えている。[48] 困窮した男が貧困から逃れる道は二つ存在する。修道士になるか、兵士になるかである。ところが困窮した女には、売春婦になるしか道が残されていなかった。どうしても売春婦になりたくない女は男装して修道士になるか、兵士になるかしかなかったのだ。ところが宗教改革以後、オランダでは修道士になることはほとんど不可能となり、唯一の道が兵士となることだったのである。

17世紀や18世紀の男服はざっくりした衣服で、女であることを隠すのには都合がよかったという。[49] しかしすべてを隠しおおすことは不可能であった。たとえばあごの線やかん高い声などは隠しようがなかった。しかし少年に化けることは可能で、多くの女性が少年となった。マリア・ヴァン・アントウェルペンは28歳のとき、16歳の少年として兵役に登録した。少年と偽ることで男装者たちは肉体的なハンデを克服することができた。力がないのは少年であるためだと解釈されたからである。[50]

当時は男装すること自体が犯罪であったのだが、当の女たちはそう考えてはいなかったようである。ドイツ人のカタリーナ・リンケンが判事に異性装が禁じられているのを知っているかと尋ねられたとき、彼女は、次のように答えたそうである。「もちろん女が男の衣服を着るのを神がお禁じになったということを私は知っております。しかしこれは既婚女性だけに当てはまるもので、独身女性は別なのです。」[51] 状況によれば、異性装も許されるというこのような考え方が例外的であったとは思われない。マリア･ヴァン･アントウェルペンの男装を家族が手助けしていたこともそれを例証する。

現代の異性装を考える際、セクシュアリティの観点は欠かすことができない。しかし歴史的な異性装分析は従来セクシュアリティの分析を避けてきた。マリアの異性装を見ると、彼女はおそらくtranssexualityであり、セクシュアリティを考慮に入れたジェンダー分析が必要になる。ただし歴史上の異性装の問題をセクシュアリティとかかわらせることは、なぜ異性装という手段をとらざるを得なかったのかという問いに対する解答を単純化してしまう可能性がある。「自分が男（女）と思っているから男（女）の服を着るのだ」といわれれば、どうしようもない。問題は自分が女（男）であると思っていながら、なぜ男（女）の服を着ざるを得ないかという点を解明する必要があるからである。もちろんセクシュアリティーと異性装の関係の問題も重要であるが、それはセクシュアリティーが一種の権力として作用するからであり、心理的な問題へとすり替えられるものではない。このセクシュアリティーの問題に関しては、稿を改めて論じたい。

3　メアリ・フリス

17世紀のロンドンに異性装者として有名になったメアリ・フリスなる人物が生きていた。そして彼女はデッカーとミドルトンによる『女番町　またの名　女怪盗モル』[52] の主人公でもある。さらに彼女の日記なるものも残されている。残念ながら、この日記は彼女自身が書いたものではないが、メアリ・フリスと何らかの接触があった人物によって書かれた可能性がある。その意味ではその細部におけるメアリ・フリスの生活描写には、もしかしたらある程度の信憑性があるかもしれない。『女番町』では、メアリ・フリスはモル・カッ

トパースという名で登場する。日記は、『世間でモル・カットパースと呼ばれているメアリ・フリスの生と死』[53] という書物の中に入っている。演劇中のモルは、実際のメアリ・フリスを参考にして完全に創作された存在なのだが、実在のメアリ・フリスがどのように見られていたかについては、まったく無関係とはいえない。さらにこの劇の最後に本物のモル、つまりメアリ・フリスが登場したらしいので、この劇中に登場するモルは、実在のメアリ・フリスにとって不快であったのではないと判断される。むしろ劇中のモルに自分を重ね合わせつつ、一種の自己満足的な誇りを抱いていたかもしれない。ただし劇後に本人が登場したとしても、劇中語られているモルは実際のモル、つまりメアリ・フリスとはあまり関係がない。日記中のモルは、おそらくそのように信じてもらいたいという願いをこめて造形された人物である。そして裁判記録に登場する正真正銘のメアリが存在する。つまりメアリ・フリスの像として、まったくの作り事としてすべての人が認める像、作り事であるが、真実だとして呈示された像、そして実際に存在していた人物を裁判したときの裁判記録を通して見られる歴史上の像という、三つの像が存在しているのである。以下、この三つの像における異性装を見ることによって、当時、異性装にどのようなイメージが固着していたのかを探ることにする。

a　創作されたモル

『世間でモル・カットパースと呼ばれているメアリ・フリスの生と死』なる書物が出版されたのは1663年であった。モルが死んで数年後に出版されたこの書物の中にモルの日記なるものが含まれている。それにつけられた前書きの中で、ニューゲイト監獄の書記がこの仕事にかかわっていることを示す部分があるので、[54] 日記の一部も彼が書いたのかもしれない。ただし日記は49頁の前後で大きく性格を異にするので、おそらく数人の人物が書いたのではないかと考えられている。[55] 前書きによるとモルは1589年にロンドンで生まれたことになっている。しかしマーク・エクレスは、確実に1589年より前、おそらくは1584年よりも以前に生まれたと推測している。[56] 彼女は男装していかがわしい商売に手を染め、ならず者として有名になった。彼女の名前を聞くだけで、上品な紳士淑女が眉をひそめるような人物であったらしい。このような紳士淑女の感性を前提に、ミドルトンとデッカーは『女番町』を書き上げた。しかし劇中のモルは口は悪いが、市民道徳を大きく逸脱するのではなく、むしろ道徳的な人物として描かれている。彼女が善良なる市民に後ろ指を指されるのは、彼女の男装のみである。この戯曲の中で、男装に対して、当時はどのようなまなざしで見られているかを示す所が数ヵ所ある。

主人公セバスチャンの父、サー・アレクサンダーがモルのことを「いやはや、この異形な姿の歩み、立ち、座るさまを目にした後では、不吉な前兆、あの流星でさえ人目を引きはせん」と言ったのを受けて、サー・ディヴィは「化け物だ。いかにも化け物だ」[57] と言う。単に男装をするだけで、化け物とは大げさであるが、サー・アレクサンダーはもう一ヵ所で、同じように、モルが半ズボンを作らせようとしているのを知って、次のように独り言を言う。「何と、半ズボンだと。これはしたり、倅め、二股かけた化物と結婚しようてのか？」[58] 長ズボンではなく、貴族のはく半ズ

ボンであることで、このような反発が生じているというよりも、男がはくズボンを女がはこうとすることに男たちが反発しているのである。

男装をすることが象徴的にズボンをはくと表現されている。そして女たちが自己主張することを、モルはズボンをはくと表現する。[59] 女がズボンをはけば男の権威が下がると、男たちも考えていたようである。サー・アレキサンダーの「何て世の中なんだ。女房が半ズボンで歩きまわれば、亭主は道化みたいに長いパンツをはかずばなるまいて」[60] という言葉がそれを示している。

日記中ではモルは子どものときから女らしくなかったと表現されている。つまり日記はモルが男装するのは女性的ではなかったからだと説明しようとするのである。そこでは彼女が礼儀と習慣において両性具有者、つまりふたなりであったと表現される。[61]『女番町』のなかにも、モルのことを「ふたなり」と表現しているところが一ヵ所ある。[62]

彼女の父親はそこそこの靴屋であり、母親はとても優しい人であったという。ここでは母親は女であるがゆえに当然ながら男よりもよほど優しかったと表現される。女は優しいという性質をもって生まれてくるのだと考えられているのである。父親と母親がとてもいい人物たちだったことを強調し、さらに彼女を矯正しようという試みがいろいろなされたが、彼女はまったく馴致されえず、その粗野な性向を取り除くことはできなかったと書くことによって、日記は、モルの悪徳をモル自身の自己責任へとつなげようとする。子ども時代の彼女はおてんばで、はねっかえりであり、男の子とばかり遊んでいて、女の子とは付き合おうとはしなかった。[63] そうであるがゆえに男装者のモルがつくられたのだと日記は書くのだ。

彼女は座って針仕事をすることなどには耐えられず、また静かに考え事をするなどということもいやで、好んで、棍棒を振り回していたし、そういう技術に秀でてもいた。パン屋に行くことや女たちの井戸端会議には耐えられなかったモルは好んで飲み屋に行ったようである。[64] 彼女は家庭の仕事はすべて嫌っており、とりわけ子どもの世話には嫌悪感を感じていたという。[65] 要するに、女性としての道徳を身につけなかったといいたいのだ。道徳といえば、モルを教皇ヨハンナと比較しているところが日記中にみえる。それによれば、モルは陰謀家であることにおいて、ヨハンナにもそれほど劣ることはなかったというのだ。[66] 当時のヨハンナをめぐる言説からして、モルが陰謀家としては大いに認められていたということなのだろう。

モルの悪徳をいろいろと紹介する日記であるが、日記の作者は、というよりも、いったい何人でこの日記形式の自伝が書かれたのかははっきりしないので、作者たちということなのだが、モルの人生にはさほど関心を抱いてはいなかったようだ。たとえば彼らは彼女の生まれた月も週も定かではないと述べるし、[67] またモルは74歳で死んだとも書く。[68] 彼女が死んだのは、1659年７月26日のことなので、74歳まで生きたとすれば、彼女が生まれたのは1585年ということになる。これはちょっと計算してみればわかることなのだが、彼らは、1589年に生まれたと書くのである。

また彼女は1400ポンドの金を友人たちのために気前よく遺したことになっており、女中たちには30ポンドもの金子を与えたことになっている。[69] しかしメアリ・フリスの遺言書

によると、彼女が持っていた財産は20ポンドと12ペンスであった。[70] だいたいこの遺言書すら、作者たちは見ていなかったようなのだ。

メアリ・フリスは1614年３月23日にエスクワイアのルクナー・マーカムなる人物と結婚している。[71] しかし作者たちは、いやな出来事があったので、メアリは独身でいることにしたと書く。[72] 要するにこの日記は真実のメアリを知らそうというのではなく、メアリを通して、ほかの事を知らせたいのだ。ではいったい何を。

この日記は、全体として、大きく二つに分けて考えるべきだろう。前半は不道徳な人物としてのメアリの不道徳さを面白おかしく描き出すもので、一種のピカレスク・ロマンの系統につながるものであろう。後半は、メアリの口を通しての護国卿体制への批判と王政に対する支持の一種の体制擁護キャンペーンである。しかし本稿はこの日記の中でメアリがどのように描かれているかを探るのが目的であり、日記を分析するのが目的ではないので、この点については指摘するだけにとどめておきたい。

b　実際のモル

1621年５月２日にロンドンのジェントルマン、リチャード・デルがジル・アレン、フランシス・ゴッダード、ヘンリ・キリグル、エドワード・サッカー、エドワード・フロリー、メアリ・マーカムを相手取って、訴訟を起こした。彼の妻が誤って投獄されたことに対する訴訟である。上記の数人のうち、最後にあがっているメアリ・マーカムがメアリ・フリスである。まずはこの訴えの内容を見てみることにする。[73]

1621年２月23日、マーガレット・デルが自宅で、上述の数名によって、捕まえられた。キリグルのポケットから、金貨８枚と、銀のシールを７枚盗んだという理由であった。マーガレットのベッド周りやかばんの中を捜索した後、彼らは力づくで、彼女を前述のメアリ・マルカムの家に連れて行った。その直後に帰宅したリチャード・デルはすぐさま巡査のアレンとともに、メアリ・マルカムの家を訪れた。そこでデルがメアリに問いただしたところ、彼女はマーガレットが自分の家に連れてこられるまで、マーガレットを見たことがないと言明した。同時にやって来たキリグルとフロリーは、彼女が確かにキリグルの懐中から金貨や銀のシールを掏り取ったと言明した。最初、デルの要請で、治安判事のサー・エドワード・サックヴィルのところに行こうということになったが、デルが、まず妻のマーガレットはメアリ・マルカムのような人たちから引き離されるべきだと主張し、その理由として、メアリは非常に評判の悪い人物であり、あらゆる泥棒や巾着切りとつるんでいると言ったので、問題がこじれた。これに対し、メアリは、自分はそういった人たちを調査せよと国王から委任されているのだと主張した。訴状には、そのあとにも双方のやり取りが延々と続くのであるが、メアリはもう登場しない。

この訴訟に対して、何通かの答弁書が残されており、[74] そのうち一通がメアリのものである。日付は1621年７月21日である。この答弁書では、キリグルがいかにして金をとられたかの顛末が詳細に語られる。それに従えば、２月22日の夜、ある通りで、女がヘンリ・キリグルに近づき、ワイン１クオートか１パイントをくれないかと商談をもちかけた。キリグルが同意したので、彼らはダウン・ブラッ

クホール通りへと向かっていたところ、女はある窓を指差し、夫の住まいだと言った。その後、女は彼のポケットから何枚かの金貨とシールを抜き取り、逃げ去った。翌日、キリグルたちが夫の住まいだというところにやって来、まさにそこにいた女が前日の女であると自信をもって確認した。

こうした訴状からは、メアリがいかなる人物であるかはあまり明確ではないが、ロンドンの闇世界と通じていた人物であり、司法当局とも何らかのつながりがある人物らしいと想像できる。この訴状からは、メアリが男装していたかどうかなどはわからないが、1611/12年１月27日付のロンドンの宗教法廷で、フォーチュン座に男の衣服を着て出演したとメアリ自身が告白している。[75] そして男の衣服を着たことが理由で、彼女はブライドウェル送りになっている。[76] なにゆえ彼女が男の服を着ることになったのかについて、アンジャラーズが裁判資料に基づいて、以下のように推測してくれている。

アンジャラーズによれば、彼女の異性装は、自分の収入を増やすための商業的かつ職業的な動機からする一種の方略だったというのだ。[77] 男の身なりをして、人々の興味を引き、その間に、すりたちが仕事をするという算段になっていたらしい。人々の興味を引くために、彼女は男の身なりをしただけではなく、楽器を演奏し、歌も歌ったようである。それが有名になり、多くの人が彼女のことを演劇にした。そのひとつが『女番町』である。メアリはこの演劇の際、舞台に登場したがゆえに当局の厳しい追及にあうことになる。そのため、彼女は異性装のエンタテイナーとしてのキャリアを捨て、ブローカーとして生きることにしたようである。つまりメアリの異性装は男になるためではなく、金儲けの手段として、割り切った形での異性装であった。誰もがメアリのことを男だとは思わず、女であるのに男の身なりをしていると考えていたのだ。

メアリ・フリスは手段としての男装だけではなく、手段として結婚をも利用した。彼女は法的な地位としての独身女と既婚者の使い分けをしながら世の中を渡っていたようである。たとえば1624年にリチャード・プークなる人物がビーバーの帽子の代金を支払ってくれないと、未婚のメアリ・フリスを訴えたところ、彼女は、自分はマルカムと結婚しており、既婚者である。したがって独身女として起訴されることなどありえないと主張している。[78] 独身といわれれば、自分は既婚だと言い逃れ、既婚だといわれれば、自分は独身だと言い張りながら、裁判を逃れていたのであろう。メアリとマルカムがどのようないきさつで、またどのような約束で結婚したかはわかっていないが、1624年段階では、同居はもう10年以上もなされていないとコメントされている。双方とも結婚しているという法的身分を得るために、結婚契約を結び、普段は双方独身として生活していたのであろう。

おわりに

本稿では近代の異性装者を紹介することにした。異性装、とりわけ男装は、女たちにとって生活の手段であったのだ。経済史においても、政治史においても、近代になって人間が解放され、多くの人がより安定した生活を営めるようになったといわれている。しかしもしかしたら、それは女には関係なかったのかもしれない。本稿では男装を扱えたのみである。近代においても女装と男装のありよ

うは大きく異なっていると思われる。その違いを明確にすることで男と女のありようを明らかにすることができるだろう。しかし本稿では、もう紙数が尽きた。こうした問題はまたの機会に譲りたい。

注

1 Alfred F. Young, *Masquerade. The Life and Times of Deborah Sampson, Continental Soldier*. Vintage Books. A Division of Random House, INC. New York, 2004.
2 Ann McGovern, *The Secret Soldier. The Story of Deborah Sampson*, Scholastic INC., 1975.
3 Young, *op.cit*., p.11.
4 *Ibid*., p.4.
5 *Ibid*., p.5
6 *Ibid*.
7 *Ibid.,* p.75ff.
8 *Ibid.,* p.86.
9 *Ibid.,* p.7.
10 *Ibid*.
11 *Ibid.,* p.9.
12 *Ibid.,* p.10.
13 *Ibid.,* p.100.
14 *Ibid.,* p.102.
15 *Ibid.,* p.138.
16 *Ibid.,* p.139.
17 *Ibid.,* p.106.
18 *Ibid.,* p.152.
19 *Ibid.,* p.158.
20 *Ibid.,* p.159.
21 *Ibid.,* p.160.
22 Rudolf M. Dekker and Lotte C. van de Pol, *The Tradition of Female Transvestism in Early Modern Europe*, Macmillan Press LTD, 1989, p.1.
23 *Ibid.,* p.4.
24 *Ibid.,* p.11.
25 *Ibid.,* p.64.
26 *Ibid.,* p.26.
27 *Ibid.,* p.64.
28 *Ibid.,* p.65.
29 *Ibid*. p.68.
30 *Ibid.,* p.66.
31 *Ibid*.
32 *Ibid*.
33 *Ibid.,* p.67.
34 *Ibid*.
35 *Ibid.,* p.68.
36 *Ibid*.
37 *Ibid.,* p.69.
38 *Ibid.,* p.68.
39 *Ibid.,* p.25.
40 *Ibid.,* p.26.
41 *Ibid*.
42 *Ibid.,* p.66.
43 *Ibid.,* p.26.
44 *Ibid.,* p.20.
45 *Ibid.,* p.10.
46 *Ibid.,* p.11.
47 *Ibid*.
48 *Ibid.,* p.32.
49 *Ibid.,* p.15.
50 *Ibid.,* p.18.
51 *Ibid.,* p.44.
52 T. デッカー / T. ミドルトン、山田英教訳『女番町　またの名　女怪盗モル』早稲田大学出版部 1988年。
53 Janet Todd and Elizabeth Spearing(ed.), *Counterfeit Ladies. The Life and Death of Mal Cutpurse. The Case of Mary Carleton*, William Pickering 1994, pp.1-73.
54 *Ibid.,* p. 7.
55 *Ibid.,* p.47.
56 Mark Eccles, “Mary Frith, The Roaring Girl”, *Notes and Queries, n.s*., 32(1985), p.66.
57 『女番町』24頁。
58 同書、57頁。
59 同書、109頁。
60 同書、57頁。
61 Todd, *op.cit*., p.8.

62　『女番町』24頁。

63　Todd, *op.cit.*, p.9.

64　*Ibid.*, p.11. 後に宗教法廷でモル自身、たいてい男の身なりで、足しげく、ビヤホールや酒場やタバコ屋に通い、さらには演劇やコンテストを見るために劇場にも通ったと告白している。P.A. Mulholland," The Date of the Roaring Girl", *Review of English Studies, n.s.* 28(1977), p.31.

65　*Ibid.,* p.12.

66　*Ibid.,* p.8.

67　*Ibid.*

68　*Ibid.,* p.77.

69　*Ibid.,* p.72.

70　Gustav Ungerers, "Mary Frith, Alias Moll Cutpurse, in Life and Literature", *Shakespeare Studies : An Annual Gathering of Research, Criticism, and Reviews*, 1(1965), p.73.

71　*Ibid.,* p.52.

72　*Ibid.,* p.15.

73　Margaret Dowling, "Notes and Observations. A Note on Moll Cutpurse—The Roaring Girl", *Review of English Studies*, 10(1934), p.67ff.

74　*Ibid.*, p.69f.

75　注64参照。

76　Mulholland, *op.cit.*, p.21. ブライドウェルは道徳矯正のための強制収容所であった。なおブライドウェルについては、乳原孝『エリザベス朝時代の犯罪者たち』嵯峨野書院　1998年、同『「怠惰」に対する闘い』嵯峨野書院　2002年に詳しい。

77　Ungerers, *op.cit.*, p.55.

78　*Ibid.*, p.53.